不器用な恋。その後

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不器用な恋。その後

【Ｎコード】
Ｎ８６７４Ｓ

【作者名】
虹乃　咲

【あらすじ】
「不器用な恋」の短編集です。
更新は不定期なり～

水族館（前書き）

小話です
よかったら、どうぞ～

水族館

珠子と惣一郎は自分達が勘違いしていたことに気付くと、それからは当然のように付き合った。まあ、勘違いと言っても、していたのは珠子だけだったんだが。

「いやいや、あの今にも人を殺せそうな目は誰でもそう思いますから」

惣一郎に珠子が後から言ったが当の本人は全く分かっていなかったようだ。・・・無自覚だったのか、なんて迷惑な人だ。

今日、2人は水族館に来ている。

2人が付き合うようになってからは、惣一郎に暇が出来た時にちょくちょく出かけている。ただでさえゲーム活動に勤しんでいた珠

子であったが、付き合うとなるとアウトドア派になるようになった。

「わあ、可愛いですね。あの、にょろにょろ」

「にょろにょろ、とは？」

珠子が指を差している先には砂から出ているミミズみたいなものがいる。本当はチンアナゴという名前なのだが珠子はにょろにょろの方が可愛いからと、にょろにょろと呼んでいる。

「にょろにょろはにょろにょろですよ」

「・・そうか」

もう２０歳を超えた大人というのに恋人繋ぎは端から見れば恥ずかしいものだが惣一郎と一緒にいるとそんな考えもない。

自然なリードで珠子をまるでどこぞの姫のように扱ってくれる。

まあ、姫というお年頃とは程遠いんですけどね。

「惣一郎さんは何が好きなんですか？」

「・・珠子」

今のはちょっと待て。

周りのご年配の方からの生温かい目が物凄く気になる。さすがに

これはきついぞ。

「ごほん、いえ、私が言ったのはですね。海洋生物で何が好き、ということですよ」

「いや、今日が初めての水族館だから好きも嫌いも分からない」

「え？」

どこの人種に水族館が初めてという人がいるんです。
行ったことがない人など数えればいるだろうが年に1回は行くという珠子には信じられなかった。もちろん、にょろにょろを見るために行くのだ。

「好きになれそうですか？」

「珠子と一緒だと、どこも好きになる」

最初は口数の少ない冷たそうな男だと思っていたが、話してみるとなかなか優しいものだった。

だが今の発言は恥ずかし過ぎる。ほら、さっきの年配のお方がまた生温かい視線を送って下さる。
珠子は居た堪れなくなって惣一郎を引きずって違う場所へと移動した。

もうちょっと、にょろにょろを見ていたかったんだけどな。

最後にもう一度、にょろにょろを見て今度はイルカのショーを見るために移動した。

「楽しかったですね」

久しぶりの水族館はやはり楽しいものだ。
イルカのショーに出てきたイルカのベン君はおっちょこちょいだったが、最後には飼育員さんが投げた小さな輪っかを見事通り抜けた姿に感動した。

珠子が余韻に浸っていると惣一郎が急に引き返した。

「え、ちょっと、えー？ど、どこに・・・行っちゃった」

尋ねようと思ったのだが惣一郎は無言でどこかに行ってしまった。
どこに行きたかったんだろう。言ってくれれば一緒についていったのに。つい恨み言を言ってしまうが、人間、言葉がないと通じな

いものもあるのだ。

にょろにょろ

仕方がないので、そこのベンチに座ってぶらぶらと待っていると影が差した。

「あ、惣一郎・・」

「あれ、珠子君じゃないか」

「あ、長谷(はせ)先生」

見ると若々しい男の人が珠子を懐かしそうに見ていた。珠子が先生と呼んだ目の前の男性はまるで３０代のように見えるが実は５０歳を過ぎている。

誰もがそんなことを思う訳がないと思うが本当なのだ。白い髪など見つからなく、彫りが深い顔には皺一つない。また毎朝、５キロ走っているため身体は衰えをしらない。

長谷先生は珠子が大学生だった時に大変お世話になった先生だ。

将来は保育士と決まっていたのだが、どこの保育所に行くか考えあぐねていたところに相談の乗ってくれたのだった。

今の保育所は先生の紹介があったために入ることが出来たのだ。

「本当は僕がもらいたいところだったんですけどね」

そう、先生は自分が経営している保育所に来ないか、と言ってくれていたがやはり地元の方が性に合っていると思い辞退したのだった。

「ありがたいお言葉です」

「いえいえ、本当ですよ」

「本当に先生は優しいですね。また先生の家に行ってもよろしいですか？」

「いつでもどうぞ」

そう言うと長谷先生は用事があったらしく、挨拶だけして去っていった。

久しぶりの恩師に会うと気分がいいものだ。珠子は鼻歌を歌いながら、ベンチで待っていると突如、怖い顔をした惣一郎が後ろの茂みから顔を出した。

「どわっ！！」

そのまま珠子の正面に立ち、肩を掴んで顔を近づけた。

「ななっ、何でそんなところから！」

「・・今の男は誰だ？」

「はい？」

「今、一緒に話していた男は誰なんだ？」

「ああ、彼ですか。彼は・・っつ！」

口を開いた瞬間、唇を惣一郎に塞がれていた。顔を捩って話そうとするが、いつの間にか肩に置いてあった惣一郎の手が後頭部にまわり、がっちりと押さえていたため動けない。

「ふ、ぅうん」

鼻にかかった声が出てしまい、自分がいるところを思い出す。ここは水族館の駐車場だ、こんな公衆の面前で堂々とキスをしていたら、いい恥さらしだ。

「ちょ、惣一郎さぁ、は、あ」

自分の手を惣一郎と自分の唇との間になんとか割り込ませて話をしようと心みる。

「は、話を・・て、や、やぁ」

惣一郎は珠子の手の平を舐めると指の一本一本に舌を這わせる。丁寧に指の付け根を舐められると、ぞくぞくして抵抗の言葉が出なくなってしまう。

「は、話を聞いてえ！」

欲望に負けそうな自分を押さえて大声を出した。

荒い息を出すと、まだ何かしたそうな惣一郎に掴みかかる。

「待って、待って下さい。いいですか？あの人は長谷先生といってですね・・」

珠子は力を込めて、何度も何度も惣一郎に説明を繰り返した。

彼は自分の恩師であり、今はちゃんと可愛い奥さんがいて４人の子供もいる、と。

それに長谷先生は妻一筋であり、心配する必要は全くない。彼にとって私はただの生徒であり、私も素晴らしい先生としか思っていないと。

「すまなかった」

なんとか理解した惣一郎は珠子の手を握って、何度も謝った。

「分かって下さればいいんです」

既に沈んでしまった太陽を遠い目で見つめながら、缶コーヒーで喉を潤す。せっかくの水族館だったのに説得の方が水族館にいた時間より長くなってしまったというのはなんだか悲しいものだ。

「君のことになってしまうと頭に血が上ってしまう」

「・・・」

これは愛されているんだろうな、それは分かるのだがいくらなんでも束縛が激しいのではないか。

優秀な社長補佐がこんなので大丈夫か、つい胡乱気に見てしまうと、大きな図体が委縮している。

それに、私を置いてどこに行っていたのだろう。

惣一郎をじっと見るとポケットから何か覗いているのに気がついた。

つい、それを引っ張ってみると、にょろにょろのストラップだ。

「にょろにょろ？」

「あ、それは・・あげようと思って」

少し照れくさそうにしている惣一郎を見て笑みがこぼれてしまった。

ま、こういう人が彼氏でもいいか。

偶に暴走してしまうが自分のことを第一に考えてくれるなんて嬉しい限りだ。

「これで許します」

珠子は少し不細工なストラップを手にとって惣一郎の手を握る。

それを見て、惣一郎もやっと笑った。

２人は手を繋いで、夕日を背にして身を預け合いながら、車へと向かった。

にょろにょろ（後書き）

虹乃が一番好きなのは、にょろにょろってことで書いちゃった

あの素朴感がすきだな

兄妹×2

今日は久しぶりに家で一緒にＤＶＤを観ようという話となった。
なぜかというと撫子さんが雄飛とデートらしいことをしたいと言いだしたのが元凶だが、堤家のお嬢様が外出するとなると黒いスーツを着た人達が２人に見つからないように後をつけながら後ろから見守るのだ。
それが、さすがの雄飛にも耐えられずに家で一緒に過ごそうとなった。
そうすれば監視はつかない。

更なる監視を押さえるために雄飛は珠子を誘った。
そうすれば惣一郎も一緒だと見越して、だ。
珠子は雄飛の本性は分かっていたが、やはり策士だと思わずにはいられない。

「今日は招いて下さってありがとうございます」
普段は履かないスカートを履いて兄と一緒に撫子と惣一郎に挨拶する。
「いえ、私の用事に合わせてもらって申し訳がないわ」

「いえいえ」

撫子さんのためなら、例え火の中、水の中、牢屋・・はないか。

撫子のために考えていたのに撫子は雄飛の腕をとって先を歩いていった。

私、撫子さんのことを思って想像していたのに。

だが相手は珠子の思いを汲み取ってくれなかった。

「・・がびーん」

兄の立場となって、その白いすべすべの肌に触りたいと羨ましそうに見ていると惣一郎は腕を組んでいる2人を羨ましそうに見ていると勘違いしたらしく、自分達も腕を繋ごうとしたが珠子は恥ずかしいと避けて一定の距離を保って並んで歩いた。

惣一郎は寂しげな顔をしていたが、人様の家でいちゃいちゃするほどの図太い神経は持ち合わせていないのだ。

目の前を行く2人が入っていった部屋を見ると思わず口が開いてしまった。

「え、なんて金の無駄使いなんだ」

その部屋はまるで、どこかの映画館のように大きなスクリーンが目の前に広がり、そしてこれまた高級そうなソファーが置いてある。なるほど、映画館の椅子は硬くて、ずっと座っていられないがこれなら背もたれを倒して寝ることもできる。

「すげえー」

「私達には一生できないことだね」

一般人を代表する椎名家の兄妹は余りのスケールさに自分達はとんでもない人達と付き合っていると改めて再認識した。

右から雄飛、撫子、間をあけて珠子、惣一郎の席となった。
しかも席には飲み物、近くのテーブルにはお菓子も置いてある。なんていう至りつくせり・・。金持ちというのは理解できない。

「それで何を観るんですか？」

珠子は身体をふかふかのソファーに身を預けながら、撫子に顔を向けて尋ねた。

「見てのお楽しみですわ」

口元に笑窪ができる笑顔を見て、珠子はぽわーっとした。
きっと恋愛だろうな、今流行りの海外の映画だろうと思っていた。

部屋が暗くなり、タイトルが発表された。

『呪ーのろいー』

「ぶはぁっ・・・！」

「のえっ！？」

タイトルと一緒に髪の長い女が睨んできた映像を観て、雄飛は飲んでいたお茶を吹き出し、珠子は身を竦めた。

そうだ、撫子は怖いものが好きだった。
遊園地でお化け屋敷に入った時の表情が思い出される。

恍惚としている撫子には悪いが椎名家の2人は一気に寒くなる。
血がすうっと引いて今から逃げようと席を立とうとする。
だが雄飛の手を撫子が掴んで、うるうるとした瞳で雄飛を見上げる。その瞬間、雄飛は自分の死期を悟った。

ふっ、残念だな。
そもそも私をダシにしたのが悪いのだ、珠子はにやりとして自分はゆっくりと立ち上がる。
残念だったな、兄よ。自分が生まれたのを後悔するがいい。
そう顔で物語って珠子は一人で逃げようとする。
しかし、腰に違和感を感じて、ゆっくりと暗い部屋の中、自分の腰についているものを見る。
それは惣一郎の冷たい手だった。

「・・あの」

「・・・」

「もしもーし」

いくら腰についている手を離すように言っても離さない。
両手で離そうともがくが、びくともせず、そしてとうとう映画が始まってしまった。

似た者兄妹

最初は看護師の女性が病院で働くところから始まった。
この女性はある医者の先生が好きで一夜の関係を持ってしまう。
しかしこの男には妻がいた。
それに激怒した女はその妻を殺し、自分も自殺してしまう。
男は直ぐに他の女をつくるが、女を部屋に招いた時に何か部屋から違和感を感じ取る。

だが、それが何かわからずにシャワーを浴びていると鏡に髪の長い女の姿が映った。

「っつ・・・！！」

珠子は耐えることができずに惣一郎の腰に掴まって顔を背けた。
しかし音は反響して聞こえてしまう。

『何でお前がここに・・！！』

『先生、酷いわ。私だけって言ったのに』

もう涙が出る。
力いっぱい腰に掴まって、もう部屋を出たいアピールをする。
すると想いは通じたのだろうか、惣一郎は珠子の手をとって自分

の方へと引き寄せながら腰を抱く。
そのまま自分の膝の上へと珠子を誘い、珠子のお腹に手を回す。
珠子の肩に顎を乗せて安堵したように見続ける。

って、想いが伝わってねぇ！！
叫びたいが、ここは一応映画館。上映中は声を出さないというマナーがある。
なんとか顎に顔を乗せている惣一郎の耳元に口を近づけて小声で話す。
「惣一郎さん、出たいです」
しかし惣一郎は身体をぴくりと震わせるだけだ。
しかもお腹に回っている手がいっそう締まる。この締め付けはなかなか痛いぞ。
「ねえ、出たいってば」
「・・もう少しだけ」
耳元で囁く惣一郎の声は熱が篭もっている。
まさか、この方、嫌がる自分に対してS心が芽生えたとか。いや、まさか。
そう打ち消したが確信した。絶対、楽しんでやがる。

なぜなら顔を背けようとする珠子の顎を掴んで無理矢理スクリーンに顔を向けさせるのだ。それならば、せめて耳を塞ごうとするが腕を掴まれて何もできない。
できるのは目を瞑って別のことを考えるだけ。
しかし、声が大きくて、考え事が浮かばない。

結局、珠子は惣一郎にしがみついて、いつもの香水の香りを嗅ぎながら震えるしかなかったのだ。

だが途中で場面は変わる。
ホラーとエロは一緒にあるのだ。

なぜか艶めかしい声が聞こえると思って珠子は顔を上げると濃厚なキスシーンの最中だった。
元凶の医者を助けようとしている無垢な霊媒師の女性だ。顔だけは良い医者にくらりときてしまったらしく、今まさに情緒が始まろうとしている。

ぬああ、頭の中で自分の煩悩を打ち消していると惣一郎が珠子を自分の方に向きなおさせる。
何だろう、と思う暇もなく惣一郎の冷たい唇が珠子の唇を覆う。

「ふ、ぬうん」

鼻から甘ったるい声が出て、はっとする。
そうだ、ここには自分達だけじゃない。横には少し離れているが撫子と雄飛がいるのだ。

なんとか声を出さないようにしながら惣一郎を睨むが相手は止め

ようとせず、珠子の背中に手が回る。

ちょ、これ以上はまずいと這う手を押さるが動きは止まりようがない。

次第に服の中へと手が入ってきた。

「ふ・・・ま、待って」

首元に唇をつけていく惣一郎の耳で囁くが惣一郎は熱い溜息を零す。

「待てない」

いやいや、待つべきだろう。だって隣には自分の兄妹がいるんだぞ。

「お願い」

これは不味いと思った珠子は恥を捨てて、この場から逃げ出そうとする。

「ここじゃ、やだ。ねえ、ここから出よう」

そして自分からキスをする。

恥ずかしくて、触れるだけのものだったが、珠子が自分からする初めてのキスに惣一郎は止まる。

すると惣一郎は珠子を逃がさないように抱っこして、部屋を飛び出し、自分の部屋へと向かった。

上映が終わった部屋には燃え尽きた雄飛と、おもしろかったですねと笑っている撫子がいる。
その手はずっと繋がれていて、雄飛は何度も逃げようとしたのだが撫子が離してくれなかった。

そして目に涙を浮かべている雄飛を見て、そっとハンカチで涙を拭きとる。

「また観ましょうね」

ぎゅっと手を握って、にっこりと笑う。
やはり雄飛様は泣いた姿が一番可愛い、と。

似た者兄妹の企みにまんまと嵌った兄妹であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8674s/

不器用な恋。その後

2011年5月17日03時32分発行